中国における感染症の歴史

李建民
(台湾中央研究院歴史語言研究所研究員)

人類の疾病の歴史において，異なる時代の医学は様々な感染症に対して常に疑念を抱いてきた．近代以前においては，感染症が大規模な死をもたらすことは頻繁にあった．そして再び，感染症の脅威が人類の生活の中に現れた．類似の症状でありながら，感染力がさらに強いと思われることで，大部分の人々の生活は不安感にあふれている．カナダの病理学者 Hans Selye（1907-1982）が述べた「疾病の緊張状態」とは何か．全ての疾病において，人から人へ伝染する可能性，それがもたらす不信感，および個人が伝染病を拡散させることに対して抱く緊張状態とは何か．

伝統中国医学には，流行病を含む伝染病に対抗した極めて豊富な観察経験があり，同時に多様な対応手段を提供してきた．私のこの学術報告は，治療過程に生じ得る医原性傷害（iatrogenic）を手がかりとして，新たな感染症史の視点？を提示することを主な目的とする．治療は，癌の過程に向かい合うのに似て，往々にして一時的あるいは永続的な傷害を引き起こすことがある．

伝統中国医学は，伝染という病理的体験に相当な経験を有している．一部の疾病は伝染しないこともある．中国では，伝染病患者の隔離のみならず，患者が使用した各種器物等についても隔離の方法が実施されてきた．それと同時に，一部の医師は，伝染を引き起こす病気が，一般的に知られている傷寒などの熱性疾患の病因とは全く異なることに着目し，その結果として多様な治療法を考案してきた．

近代の新たな感染症時代が到来する以前，伝統医学は伝染病にはしばしば無力であった．日本の重要な科学者である北里柴三郎（1853－1931）の画期的な貢献は，国家的な衛生の制度化という新たな時代をもたらしたことである．一部の伝統医学における医療的知見は，新たな感染症が出現した後においても，依然として人類が病に抵抗する力について示唆を与え続けている．

現代免疫学が登場するまでは，人類が感染症の発病原因に関する説明は，信頼に足るものではなかった．中国医学は膨大な医学典籍を蓄積してきたが，それらをそのまま適用することはできない．治療の過程での失敗経験，とりわけ近代の明清期において流行病が発生した時代には，死亡者数の記録からも明らかなように，伝染は人類の生活様式を変容させた．これには，上述したような伝染病による緊張状態も含まれるのであろうか．

伝染病は，公衆衛生に関わる極めて深刻な課題である．隔離を実施するためには，政府に相応の強い執行力が求められる．古代では風習やさまざまな要因により，人々の往き来を完全に避けることは難しく，宗教や家族の事情により集まる必要があるため，国家権力が公衆衛生を効果的に管理することは困難であった．公権力が感染が疑われる患者の管理（追跡など）を効果的に行う

ためには，人類にとって最も重要なプライバシーや自由を犠牲にせざるを得ない．現代の感染症対策には，しばしば上述した「医原性傷害（iatrogenic）」を引き起こすことがあるか．伝染に関するデマはその例か．現代の医療制度も，特定の社会的弱者にとっては不利か．実際に死亡や感染の事例は，病院など医療機関において頻繁に発生している．流行病の周期が長くなる（たとえば3年やそれ以上に継続する）と，いわゆる伝染病による緊張した生活状況は，心理的・精神的な生存状態〔生態学の概念．生物が生存する過程で，自己の要因と外部の要因が複合的に影響し合って形成される総合的な状態〕をさらに悪化させることは間違いない．

集団の抗病力〔疾病に対する抵抗力〕を高めるにはどうすればよいか．伝統医学は，季節的な疾病の変化に着目したが，季節によって生じる環境の変化は抗病力の低下を引き起こすか．中国医学はかつて「善く治する者は皮毛を治す」という説を提唱していた．彼らは病気の初期段階においては身体の表層にあり，制御可能であると考えていた．感染症の初期には病勢の進行を徹底的に抑制し，より深い，あるいは重篤な段階へと発展させないことが必要である．同時に，効果的な治療をおこなうことで，感染症が患者の他の関連する病症を同時にアウトブレイクさせたり悪化させたりしない。いわゆる「表層の感染症」は，伝統中国医学における衛気などの人体内部における働きと関連している．衛気には防衛の効能がある．感染症の種類は異なっても，その多くには咳や筋肉痛などの共通する症状がある．感染症の初期段階において，いかに重症化させないかについて，伝統中国医学の集団的抗病力についての歴史的経験は今もなお深い啓発性を有している．

1642年頃に成書した『瘟疫論』では，瘟疫に罹患した後の飲食による体調管理が特に重視されている．病後の後遺症を避け，また回復後の再感染を防ぐ上で，食事は最も中核となる治療法の一つである．伝染病の予防は，食事を通じて炎症の反復を制御することと関連する．つまり，人類が何を食べるかは，単に栄養に関わるだけではなく，抗病力とも密接に関わっている．各国間で，人々の食生活がますます似通ってきた影響で，人体の伝染病への抵抗力が低下している．Moises Velasquez-Manoff の洞察に満ちた著書『An Epidemic of Absence』〔邦訳名『寄生虫なき病』〕では，食習慣（ファストフード店の普及など）を含む疾病の環境全体が人類の免疫に関する問題を悪化させていると考えている．

中国伝統医学は，患者の様々な体質を見分けることを非常に重視する．伝染病が発生しうるのは，その伝播過程において，いわゆる易感染者（Susceptible person）が宿主となるからである．伝染病の易感染者には，いわゆるアレルギーに関連する症状を持つ患者も含まれる．近代医学における微生物療法は，退行性疾患（パーキンソン病など）や癌，または自己免疫疾患などに対しては，ほとんど効果がない．後者の例として，人体の免疫システムが逆に自身の身体組織器官を攻撃してしまう関連疾患が挙げられる．この種の疾病は20世紀末から増加傾向にある．

中国医学は流行病の外部要因を重視すると同時に，内因性の様々な病症にも一層重きを置いている．これは，感染症が蔓延する環境において，いかにして自身が感染しにくい抗病力の強い集団となるか，ということである．

細菌学の時代が到来する以前，中国伝統医学は病気の原因について明確に理解していたわけではなく，例えば，一部の医家は「雑気」を感染症の病因としていた．しかしながら，いくつかの有効な薬物を用いて，罹患者の抵抗力を高め，体内の疾病環境を調整することで，重篤な感染症でさえも治療してきた．例を挙げれば，痢疾〔赤痢〕は当時頻繁に発生した感染症の一つであり，患者は通常，汚染された食べ物や飲み水を介して下痢などの症状を引き起こす．痢疾は慢性的な下痢の状態に移行すると，患者によっては十年から二十年以上にわたって下痢が続くことさえある．中国医学では葛根関連の処方を用いて制御することが可能である．慢性的な痢疾が，心理的側面においても緊張した病的状態を引き起こすことは疑いようがない。

感染症を取り巻く環境全体の変化に伴い，原因不明の伝染病がますます多く出現しているのだろうか．中国疾病史の権威である范行準（1906-1998）は，百万字を超える大著『中医病史新論』において，伝染病の主な傾向について，次のように述べている．「元明以降の医家は，様々な伝染病を次第に痧症の中に組み入れ，明清以後の傷寒・温病の地位を奪う基礎を築いた．」痧症とは，原因が不明な伝染病の総称である．たとえば，1917 年に曹炳章が論じた様々な形態の痧症の中には，「羊毛痧」と呼ばれるものがある〔『瘟痧証治要略』〕．医師は，この伝染病にかかった患者の皮膚から羊毛のような病理的産物？を針で取り出せた．

感染症の環境要因をどう見直したらよいか．現代医学は日々進化しているものの，感染症の変化も人類の集団的な抗病力に新たな挑戦を突きつけている．清代の著名な医家，王士雄（1808-1868）は感染症の臭いについて，「臭毒の二字は，この地の病因にぴたりと合致する」と述べている．彼はまた，流行病が常に人口の密集や都市の環境と関連することを観察し，「人煙が密集する地域では，疫癘がしばしば流行し，気が熱くなると，晦気も盛んになる」という．人口が密集する都市の封鎖や悪臭がただよう環境の厳重な管理は，新型感染症に直面した際のやむを得ない管理の選択肢なのである．清代の著名な伝染病学者である戴天章も，傷寒などの流行病は「病は臭気がなくとも人に感染する」が，伝染病などに関連する感染症については，「鋭敏な嗅覚を持つ者でなければ，判別はできない．便所の糞の臭いや不吉な土地の屍気と比べて見れば，その違いは明らかである．」と指摘している．つまり，伝染病の病因は容易には察知できず，糞便や死体の臭気よりもさらに判別が難しいということである．加えて，微生物が減少し，人類の環境が清潔になると，これまで理解されていなかった感染症がかえって増加している．人類の伝染病の環境は，実際には他の生物や社会文化的な関連条件との均衡の上に成り立っているのである．

本論の最も核心的な論点，疾病によって引き起こされる緊張した生存状態に戻る．パンデミックの時代には，集団はさまざまな不安に駆られ，制御不能な行動にさえ陥ることがある．いろいろな信仰形態がワクチン接種と日常生活の中で不思議な形で新たに結びつく．一方で過剰な治療によって生じる医原性傷害（iatrogenic）も同時に最小限に抑えられる．

感染症の時代には伝染病に立ち向かう精神療法はより一層必要なのか．流行病が未だ収束しない段階において，他者を思いやる信頼に足る方法は，いかなるものか．そして公衆衛生に対するより健全な視野とは．英国の医学史家 Mark Harrison の労作『Disease and the Modern World』

は，人類は先進国の伝染病の状況に関心を持つだけでなく，同時に地球上の立ち後れた貧困地域における集団的健康教育にも目を向けるべきだと提言している．すべての国が台湾のように，流行病に対して短期間に自国産のワクチンを開発できるわけではない．つまり，誰もがみな感染症の恐怖から解放された生存の自由を享受すべきなのだ．